

(トップページ: <http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/> )

(サウジアラビア: <http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/SaudiArabia.html>)

マイライブラリー:0354

(注)本稿は 2015 年 8 月 17 日から 9 月 8 日まで 8 回にわたり「アラビア半島定点観測」に掲載した  
ものです。

2015.9.9

前田 高行

### 迷走と暴走を繰り返す老国王:サルマン・サウジアラビア国王

目次	頁
1. 迷走する老国王:南仏のバカンスをわずか 1 週間で切り上げ	2
2. 暴走する老国王:即位後わずか 3 カ月で皇太子の首をすげかえ	3
3. 老国王の迷走と暴走のルーツ	5
4. ムハンマド副皇太子は神童か?	6
5. 揺れ動く対米外交	8
6. 泥沼に引きずり込まれたイエメン紛争	9
7. 揺らぐ「イスラムの守護者」神話	11
8. 米国にすぎるほかないサルマン	12

## 1. 迷走する老国王:南仏のバカンスをわずか1週間で切り上げ

サウジアラビアのサルマン国王は8月2日、南仏ニースに近いコートダジュールの別荘からモロッコの港町タンジールに到着した。空港には首相などモロッコ政府要人の他、子息のハリド王子を含む多数のサウド家王族も出迎えた。

実はサルマン国王は前月25日にバカンスのためコートダジュールに入ったばかりであった。国王には一族の王子・王女達、お付きの者、さらには仏在住のサウジ人を含め1千人もの大集団が付き従い、ニース近辺のホテルは殆ど彼らに占拠されたのである。それだけにとどまらず別荘周辺の道路は封鎖され、別荘前に広がる海岸は一般人の立ち入りが禁止された。

何しろ石油成金の国の王様ご一行であり、別荘周辺のホテルを始め食料品納入業者たちは時ならぬブームに沸き、さらに王女達による高額ブランド品や化粧品、宝飾品の爆買い・買い漁りが生まれる。地元は歓迎ムードに溢れ、多少鬻ぎを買おうような行為にも目をつぶるつもりであった。

地元と同様にサウジの王様を歓迎したのがフランス政府である。歴代の政府は左翼右翼を問わずサウジアラビア大歓迎なのである。何故ならサウジアラビアはフランスの戦略輸出商品である戦闘機・兵器、原発プラント、民間旅客機エアバスの重要なお客だからである。米国あるいはドイツのような先端IT製品や高度な民生技術を持たないフランスはとにかく国を挙げてこの3種の戦略商品の売り込みに必死なのである。

国王バカンス前の6月には、息子で国内序列No.3のムハンマド副皇太子兼国防相がフランスを訪問、オランド大統領と会談している。仏大統領が一国のNo.3と会談するのはかなり異例のことである。メディアはサウジアラビアがフランスから軍用ヘリ23機、原発2基、エアバス50機など総額120億ドルの商談の詰めを行ったと報じている<sup>1</sup>。その時、ムハンマド副皇太子は父国王が南仏でのバカンスを希望していると打診、これに対してオランド大統領が歓迎の意向を示したと思われる。大統領の意向は南仏地元の警察に伝わり、道路の封鎖、別荘前の海岸の立ち入り禁止などの警護措置が展開された。大統領としてはサルマン国王に最高のおもてなしをするとともに、一方ではフランス人の間に根強いイスラムフォビア(イスラム嫌悪感情)により不測の事態が発生することも恐れただけである。

しかし国民の大半はサルマン国王の来訪を苦々しく思い、一部は反対運動を展開した。ここで思い出されるのは今年1月にパリで起こったシャルリー・エブド襲撃事件である。風刺画週刊誌のシャルリー・エブド社をイスラム過激派が襲撃、10人を殺害した事件は仏国民の記憶に新しい。サウジアラビアはイスラム原理主義のワッハーブ派を国教としており、西欧諸国では同国をイスラム過激派の温床とみなしている。したがってフランス国民はサウジアラビアに厳しい目を向けるのである。

フランスは自由と平等と友愛の三色旗を国旗としており、宗教に対しても寛容であると思われているが、全人口の7.5%、470万人に及ぶムスリム(イスラム教徒)<sup>2</sup>に対して、多数を占めるキリスト教系のフランス人達がすべて寛容であるとはとても言えない。移民排斥を標榜する極右政党がそれな

りの存在感を示していることから分かる通りフランスは外交あるいは国際舞台では自由・平等・友愛を唱えるものの、国内では言行不一致であることが少なくない。サルマン国王はよりにもよってそのようなフランスをバカンス先に選んだのである。

サウジ国王が夏のバカンスに外国にでかけるのは珍しいことではない。前国王のアブダッラーはモロッコがお気に入りであり、前々国王のファハドはスペインのコスタ・デル・ソル(太陽海岸)に広大な別荘を持っていた。彼らも今回と同じく多数の随行者を引き連れてバカンスを楽しんでいる。しかしフランスとこの二国では大きな違いがある。モロッコは同じムスリムの国であり、また経済的に苦しいスペインは大金を落としてくれるアラブの王様に甘い。それに対して誇りが高くイスラム嫌いのフランス人は容赦がない。



サルマン国王は休暇旅行先の選択を誤った。息子のムハンマドが父親が歓迎されると思いこんだこと、そしてフランス行きを諫める側近がいなかったことが今回の迷走につながった。15万人と言われる反対署名にもかかわらず多くの随行者を引き連れて南仏に乗り込んだ国王ではあったが、王女達(同行者千人とすれば娘、孫娘、姪たちを含む王女が数十名以上いたはずである)はそこでとんでもない現実にごち当たった。大金を懐にニースのブランド店に爆買いに繰り出した彼女たちを待ち受けていたのは、現地のフランス人たちの冷ややかな視線だった。

サルマン国王が南仏退去を決断したのは多分王女たちの訴えがあったからに違いない。彼は浮かぬ顔でニースを後にし、モロッコに向かったのである。(写真はフランスからモロッコに向かうサルマン国王)

## 2. 暴走する老国王: 即位後わずか3カ月で皇太子の首をすげかえ

南仏バカンス騒動を迷走とするならサルマン国王が1月の即位以来発令した数々の勅令は暴走と呼ぶにふさわしいものかもしれない。アブダッラー国王が死去した今年1月23日、新国王に即位したサルマン・ビン・アブドルアジズは最初の声明で異母弟のムクリン副皇太子を皇太子に指名するとともに前国王の路線を踏襲すると述べた<sup>3</sup>。一般市民や諸外国は新国王がこれまで同様穏健かつ慎重にスタートしたものと好意的に受け止めた。

ところがその舌の根も乾かない1週間後の1月29日、サルマンは衝撃の人事および組織変更の勅令を発令した<sup>4</sup>。人事ではアブダッラー前国王の息子でリヤド州知事とマッカ州知事であったトルキ王子およびミシャル王子を解任、その他故スルタン元皇太子の息子で国家安全評議会(NSC)事務局長のバンダル王子(元駐米大使)および中央情報局(GID)長官のハリド王子を解任した。同時に組織面では従来からあった石油最高会議、国家安全評議会(NSC)などが廃止され、新たに政治安全保障問題会議および経済開発問題会議の二つの会議に集約された。

二つの会議の議長にはそれぞれムハンマド・ビン・ナيف副皇太子兼内相(故ナيف元皇太子の子息)及びムハンマド・ビン・サルマン国防相(国王の子息)が任命された。因みに二人のムハンマドのうちムハンマド国防相のみは両方の会議のメンバーに名を連ねている。後にも触れるがムハンマド・ビン・サルマンは今年30歳になったばかりであり、サルマン国王が偏愛する息子と言われている。内閣改造も同時に行われ司法大臣、教育大臣、文化情報大臣等が交代したが、新大臣はいずれもサルマン国王あるいはムハンマド国防相と極めて近い関係にある人物であった。

これらのことから浮かび上がるのは、アブダッラー前国王一派の追放、及びサルマン国王の側近により政治権力を独占しようとするサルマンの意図である。

3か月後の4月29日、サルマンはさらに驚くべき人事を発表した。何と3か月前に皇太子に指名したばかりのムクリン王子を解任し、ムハンマド・ビン・ナيفを副皇太子から皇太子に昇格させ、その後任として息子のムハンマド国防相を副皇太子に指名したのである<sup>5</sup>。ムクリン王子はわずか3か月で皇太子の座を滑り落ちたのである。ムクリン王子の能力に問題があった訳ではない。また皇太子、副皇太子の人事は国王の専権事項ではなく初代アブドルアジズ国王の36人の息子(あるいは孫)からなる「忠誠委員会」の承認が必要である。報道によれば忠誠委員会で4人の王子がサルマンの息子の副皇太子就任に反対票を投じたと伝えられ、さらにムクリン退位の条件として多額の金銭がサルマン側から支払われたとの噂も流れている。

ムハンマド・ビン・ナيفを皇太子に指名したことにより王位は第三世代に引き継がれることが明らかになった。第二世代から第三世代にいつバトンタッチされるかは近年のサウジアラビア家の最重要課題であった。これを踏まえると皇太子がムクリンからムハンマドに交替したことにはそれなりの大義名分が立つ。数多い第三世代の王子の中でムハンマド・ビン・ナيفが新皇太子に指名されたことについてはサウジアラビア家内部でも異論はなかったものと思われる。と言うのは彼が内務省副大臣当時、父親のナيف内務相(当時)の外遊中に訪問客を装った自爆テロ犯に襲われ危うく一命をとりとめたことがあり<sup>6</sup>、それ以来彼はサウジアラビア家の英雄として第三世代の中で別格視されるようになったからである。豊富な国内テロ対策の経験は現在のサウジアラビアの国情にぴったりなのである。

これに対してもう一人のムハンマド・ビン・サルマンの副皇太子指名にはサウジアラビア家の王族ばかりでなく世界中が驚いた。しかし二人のムハンマドを見ればそこにサルマン国王得意の深慮遠謀がうかがえる。それはムハンマド皇太子は55歳、既婚であるが子供は娘(王女)ばかりであり、息子(王子)がいないことである。副皇太子は30歳と若く未婚であるが、将来結婚して王子をもうける可能性は高い。

つまり近い将来ムハンマド・ビン・ナيفが国王となった場合、新皇太子にムハンマド・ビン・サルマンが指名されることがほぼ確実であり、サウジアラビア家内部にお家騒動が起こる可能性は低い。しかもうまくすれば王位の系統が将来生まれるであろうムハンマド・ビン・サルマンの息子に引き継がれる可能性も考えられる。それはサルマン国王直系の血筋がサウジアラビア王国の継承者となることを

意味する。以上はあくまで将来の仮定の話であるが、権謀術策に長けたサルマンなればこそその説得力のある話と言えないだろうか。

サルマンの老い先は短い。だから彼は暴走と見られかねないことも平気でやりそうである。権力を握った暴走老人ほど扱いにくいものが無いのは古今東西変わらない歴史の真実である。

### 3. 老国王の迷走と暴走のルーツ

サルマン国王は 1935 年生まれ、今年で 80 歳になる。アブドルアジズ初代国王の 25 男であり、名家ステイリ家出身のハッサ王妃が生んだ 7 人の王子、俗にいう「ステイリ・セブン」の 6 男である。長兄が先々代国王のファハド、次兄が長く国防相を務めたスルタン、三番目の兄が元内務相のナイフであり、サルマンが皇太子に指名したムハンマドはナイフの息子である。スルタンは兄ファハド国王時代の 1986 年に第二副首相のポストに就いた。当時は副皇太子のポストは無く第二副首相は国王＝首相、皇太子＝第一副首相につぐ No.3 のポストである。そしてファハドが亡くなり 2005 年にアブダッラーが国王に即位するとスルタンが皇太子となり、時をおかずしてナイフは第二副首相となった。

スルタンはアブダッラーよりも若いためアブダッラーが先に亡くなりスルタン国王の時代が来ると誰しもが考えていた。不幸にしてスルタンが 2011 年に亡くなると、新しい皇太子にナイフが指名された。アブダッラーが 1925 年生まれに対してナイフは 8 歳年下の 1933 年生まれである。この時、ステイリ・セブンの兄弟が次々と世襲筆頭候補に擬せられることに対して他の王族から批判の声が上がったが、その急先鋒が富豪アルワリード王子の父親タラール殿下であった。

サルマンはそのことを意識していたと思われ黒子役に徹した。長兄ファハド国王が不治の病に倒れアブダッラー皇太子(当時)が執政として実権を握った時にはリヤド州知事としての職務を放擲し、スイスで療養中のファハドの病室に張り付いたが、これはアブダッラーの即位後もステイリ・セブンの勢力温存を図るために他ならなかった。そして 2005 年にアブダッラーが第六代国王に即位した後は、スルタン、ナイフの兄二人とともにアブダッラーをけん制しつつ、権謀術策をめぐらし、スルタン国王―ナイフ皇太子体制を築くことに専心した。この場合、さすがにサルマンが次々期の国王になる図式は他の王族が警戒するはずである。このような事情からサルマンがスルタンあるいはナイフと同じコースを歩むと考えた者は少ない。

サルマンはいずれ国王になるであろう兄二人の参謀に徹しサウド家の中で権謀術策を尽くした。彼はそのため外国訪問はほとんどせず、またイスラム過激派が蠢動しつつあった国内の治安対策についても兄たちにまかせっきりだった。つまり彼は策謀家であり兄二人の腰巾着だったと言えよう。そのような彼が皇太子であった兄二人が相次いで亡くなり、さらにはアブダッラー国王も死亡した結果、まさに「瓢箪から駒」として皇太子さらには国王になった訳である<sup>7</sup>。

このようなサルマンの政治姿勢は彼を権謀術策には秀でているが、国家の指導者としてのリーダーシップあるいはビジョンに欠けカリスマ性の乏しいスケールの小さな人物に作り上げた。さら

に彼自らが戦略家であるため彼を支えるスタッフの育成を怠った。優秀な戦略家必ずしも優秀なトップたり得ないのである。

そしてもう一つ指摘できるのは老いの問題である。冒頭に触れた通りサルマン国王は 1935 年生まれで今年 80 歳になる。アブダラー前国王(1925 年生)が 2005 年に即位した時と同じ年齢であるが、アブダラーの場合は既に皇太子時代の 1995 年から執政として実権を握っており、実質的な治世は 20 年間に達する。それに対して 80 歳のサルマンが今後 10 年以上実権を持ち続けることができるとは考えにくい。ましてファハドはじめ彼の 3 人の兄たちも 80 歳そこそこで亡くなっている。彼自身も 2010 年に背骨の手術を受け、また左腕が少し不自由であるなど健康に問題を抱えている。サルマンの老い先は長くない。

だからこそ彼は自分の目の黒いうちに戦略家としての最後の仕上げをすることに執念を燃やしていると考えられる。彼は第三世代へのバトンタッチと言う大義名分を掲げ、故ナイフ内相の遺児で甥のムハンマド・ビン・ナイフを皇太子に引き上げ、それに連動する形でまだ 30 歳の息子ムハンマドを副皇太子に据えたのである。サルマンには息子が 12 人おり、ムハンマドは 6 番目である。年上の 5 人の息子を差し置いて、実務能力が未知数のムハンマドを副皇太子にしたサルマンの真意を部外者が推し量るのは難しい。しかし今回のことがサルマン家のみならずサウド家の将来の火種にならないという保証は無い。サルマンの迷走と暴走は今後も続きそうである。

#### 4. ムハンマド副皇太子は神童か？



副皇太子となったムハンマド・ビン・サルマンは 1985 年生まれで今年 30 歳になったばかり。第三世代の王子の一人である。初代国王の 36 人の息子たちである第二世代は故サウド第 2 代国王が 1902 年生まれ(1969 年没)、35 男の前皇太子ムクリンは 1945 年生まれと幅がある。従って第三世代の年代幅はさらに大きく、たとえば最近亡くなったサウド前外相(故ファイサル第 3 代国王子息)は 1940 年生まれでムハンマド副皇太子とは 45 歳違いのいとこ同士である<sup>8</sup>。サウド家の第三世代をひとくりに論じることは難しい。

このことはサルマン国王の息子、すなわち副皇太子の兄弟たちにも言えることである。現在わかっている限りではサルマンには 12 人の息子がいる<sup>9</sup>。王妃は 3 人であり、このうち最初のスルタナ王妃(2011 年没)との間には 5 人の息子がいる。長男ファハドと 3 男アハマドは亡くなっており、生存している最年長の王子はスルタン(1956 年生)であるが、パイロット出身の彼は中東初の宇宙飛行士として知られ、現在遺跡観光庁長官の他慈善団体である障害児童協会会長を兼ねている。慈善事業はサルマン国王がこれまで最も力を入れてきた事業であるが、イスラムの慈善事業は過激派の活動支援と紙一重の部分がある。事実、サルマンの熱心な慈善活動は米国から疑惑の目で見られており、彼と米国の関係には微妙なものがあるのは間違いない。



そして4男アブドルアジズ(1960年生)は石油鉱物資源省でキャリア官僚としてスタートし、現在は副大臣であり、5男ファイサル(1970年生)はマディナ州知事である。彼らの母親スルタナ王妃はステイリ家出身であるが、サルマン国王の母親もステイリ家出身であり、彼と7人の兄弟はステイリ・セブンとして良く知られている。ステイリ家はサウド家王族の中で特別な地歩を占めていると言えよう。

これに対してムハンマド副皇太子の母親はFahdah王妃であり、彼自身は上記5人とは異母兄弟の関係になる。ウィキペディアによればFahdah妃はHithalayn家出身となっている<sup>10</sup>が同家がどのような家柄であるかは不明で、ステイリ家ほどの名家とは言えないようである。

その他にも7人の王子がいるが母親は不明である。このうち8男トルキ王子は中東最大のメディア・グループと言われるSRMG(Saudi Research & Marketing Group)の会長を異母兄のファイサル・マディナ州知事から引き継いでいる。SRMGはサルマンがリヤド州知事時代の1988年に設立され、アラビア語紙Asharq Al Awsatや英字紙Arab Newsを発行しているサウド家の御用達メディア、もっと端的に言えばサルマンのお抱えメディアとして彼の息子たちが経営に関与してきた。ところが同社は一時経営危機に陥り、同じサウド家の富豪アルワリード王子が資本参加、現在はアルワリードの投資会社Kingdom Holdingが29.9%の筆頭株主であり、5男ファイサル(現マディナ州知事)が6.8%を保有している状況である。9男ハリド王子はシリア空爆のパイロットとして最近紙面をにぎわせた。

以上のことを総合するとサルマンの息子たちのうち政府機関での実務経験が長いのはアブドルアジズだけであり、その他の息子は親譲りの慈善団体やメディアのオーナーとして権勢を誇ってきたのである。但しSRMGは実質的な経営権を手放し名誉的な会長職を保っているにすぎない。つまりスルタナ妃の息子たちは組織のリーダーもしくは経営者としての能力に疑問符が付くのである。厳しい見方をすればサルマンはスルタナ妃の息子たちの教育を誤ったとすら言えそうである。

そのように考えればサルマンがムハンマド王子に期待するのも無理のない話である。しかも55歳と言う遅くに生まれた息子だけに偏愛の気持ちが強いのであろう。世情では王子は高校-大学と優秀な成績を収めたと言われ、卒業後はリヤド州知事顧問、皇太子府長官として一貫して父親のもとで修行している<sup>11</sup>。サルマンにとってムハンマドが可愛くないはずはない。

しかしムハンマドが優秀であるかどうかは慎重に考えなければならない。権力者が自分の息子を高い官位に引き上げる時、その息子が若いころから非常に優秀な神童であったという神話が必ずついて回る。権力者の取り巻きのそのような神話を広めるのである。エジプトのムバラク大統領、イラクのフセイン大統領そしてリビアのカダフィ大統領の政権末期に息子たちが後継候補に擬せられた時、同じような話が流布された。我々日本人の身近で言えば北朝鮮の金正日および金正恩は共に神童だったことになっている。

もちろんムハンマド副皇太子が無能だなど言うつもりはない。他の異母兄弟あるいは他家のいとこたちとの相対的な比較の問題であろう。但し殆ど人は彼が将来必ず国の指導者になれるなど

とは思っていないはずである。今後彼の実績を判断し、そして同時に彼を取り巻くパワーバランスが崩れないかどうかを注意深く見守る必要があることだけは間違いなさそうである。

## 5. 揺れ動く対米外交

米国オバマ大統領の呼びかけで5月14日、ワシントン郊外のキャンプデービッドに湾岸 GCC 諸国の首脳が集まった。イランとの核協議合意を目指して最終段階にあった米国は、シーア派のイランに強い警戒心を抱く GCC 諸国を説得し、同時にシリア、イラクでますます勢いを増す IS(イスラム国)対策として GCC の支援(特に資金的な支援)を得る必要があった。



大統領の呼びかけに対してサウジアラビアは国王自身ではなく皇太子と副皇太子の二人のムハンマドを送りこんだ<sup>12</sup>。この会議に最高首脳が出席したのはクウェイトとカタールの2か国のみで、サウジアラビアの他、UAE、オマーン、バハレーンはいずれも皇太子・外相クラスの代理出席であった。米国と GCC 諸国の格の違いを考えれば、4か国がこのような形で対応するとはオバマ大統領も随分

軽く見られたものである。

UAE のハリーフア大統領、オマーンのカブース国王が病気のため海外訪問できないことは周知の事実である。バハレーンのハマド国王はサウジアラビアに気兼ねして本人出席を見合わせたのであろう。サルマン国王の欠席理由について多くのメディアは米国がイランに譲歩しようとしていることに強い不快感を抱いたためであると報道した。蛇足ながらイスラエルのネタニヤフ首相も同じ理由でオバマ大統領を非難している。日頃から対立し、それでいて中東で最も親米的なサウジアラビアとイスラエルが米国に対して同じような姿勢を見せているのは極めて興味深いことである。

メディアの推測はほぼその通りなのであろう。しかし少しうがった見方をすればサルマン国王欠席には別な理由も考えられる。それはサルマンが米国を嫌っているのではないかと言うことである。もう少し正確に言うなら、米国がサルマンをうさん臭く見ていることに対して彼が不信感あるいは猜疑心を持っているためと思われる。さらに加えるとすれば、サルマンが外交に疎いこと、そして最愛の息子ムハンマド副皇太子に対米外交デビューをさせるための親心と考えられないだろうか？。

9. 11米国同時多発テロでイスラム慈善事業に対して米国が疑惑の目を向けた。モスクでの金曜礼拝で多額の寄付が集められ、その浄財は貧者、戦争孤児、寡婦、パレスチナ難民など国内および世界各地のイスラム教徒(ムスリム)救済に向けられてきた。米国はかねてから寄付の一部が複数の外国銀行口座を通じてマネー・ロンダリング(資金洗浄)されイスラム過激派組織に流れていると疑っていたが、9. 11テロを契機に追及を始めたのである。その結果、イスラム慈善組織のトップ



であったサルマン・リヤド州知事(当時)にも疑惑が降りかかった。真相は不明である。しかしイスラム過激派組織に湾岸富裕層の金が流れていたことは紛れもない事実であり、サルマンの知らないところで彼が関与していた慈善組織から不正な金が流れていた可能性は否定しきれないのである。米国はサルマンに疑惑の目を向けた。ちょうどそのころの 2002 年 7 月、彼の 3 男アハマドが亡くなったが、これについて 9.11 テロとの関与をほのめかす報道も流れている。サルマンは米国を恨みむしろ米国離れに傾いたのではないかと言うのが筆者の推論である。



6月に息子のムハンマド副皇太子を米国と対立するロシアに派遣しプーチン大統領と会談させた<sup>13</sup>。さらに同月、副皇太子はパリでオランド仏大統領とも会談している<sup>14</sup>。フランスはとかく米国と一線を画したがる国である。そしてロシアもフランスも兵器産業が重要産業であり、国防相であるムハンマドが訪問することは米国に対するけん制にもなる。実際彼は両大統領と軍事協力について協議しており、フランスとは兵器購入を含む総額 120 億ドルの契約を取り交わしたと言われる<sup>15</sup>。このほかフランスがロシア向けに建造しながら経済制裁で破綻になり宙に浮いたヘリ積載空母の売却問題が話し合われたとの報道もあるほどである。

しかしサウジアラビアの体制が米国抜きで安泰であるはずがない。そのような単純な事実が気が付かないほどサルマンが外交音痴とは思われない。イラン核協議合意後の 7 月 22 日、国王はジェッダでカーター米国防長官と地域情勢について話し合った。そして 8 月 27 日、ホワイトハウスはサルマン国王が 9 月 4 日にワシントンでオバマ大統領と会談すると発表した<sup>16</sup>。この時、国王はモロッコで休暇静養中であつた。ワシントンは近い。米国を袖にしてみたり、再びすり寄ったり、サルマンの外交政策は迷走気味である。

## 6. 泥沼に引きずり込まれたイエメン紛争



サウジアラビアの隣国、アラビア半島南端のイエメンが内戦で四分五裂し、サウジアラビアが泥沼に引きずり込まれている。

2011 年の「アラブの春」で 30 年以上続いたサーレハ独裁体制が崩壊したが、この時政権打倒の市民運動の先頭に立った女性指導者タワックル・カウマンは同年のノーベル平和賞を受賞している。2014 年に当時 17 歳のマララ・ユスフザイが受賞するまではタワックルが最年少であつた。翌 2012 年の選挙でハーディ副大統領が暫定大統領に選ばれイエメンは民主国家として再生するかに見えた。しかしサーレハ独裁政権の終焉は新たな混乱の始まりでしかなかった。同年 5 月には「アラビア半島のアル・カイダ(AQAP)」の自爆テロで政府軍兵士 96 人が死亡するなど各地でテロ事件が発生した<sup>17</sup>。

アル・カイダはサウジアラビア出身のオサマ・ビン・ラディンがアフガン戦争当時の 1988 年に創設したスンニ派過激組織である。サウジアラビアは同じスンニ派のワッハーブ派を国教としている。アル・カイダもワッハーブ派も同じサラフィー主義のイスラム原理主義である。しかしサウジアラビアそのものはサウド家が絶対的な権力を握る専制君主制の世俗主義国家であり、過激なイスラム原理主義とは相いれない。そのためサウド家はアル・カイダに強い警戒心を抱いている。

イエメンの混乱はますます激しくなり、昨年からは北部、つまりサウジアラビアとの国境地帯に住むフーシ部族が武装蜂起しスンニ派の中央政府に反旗を翻した。フーシはシーア派イスラムを信奉しておりスンニ派のサウジアラビアとは対立関係にある。フーシはサウジアラビアに対してロケット砲攻撃を行い、時には越境してサウジの治安部隊と交戦、サウジ側に死傷者が出ている。サウジアラビアはイランが背後でフーシを支援しイエメンの内政に干渉していると非難している。北部のフーシと南部のアル・カイダは政府軍をしのぐ勢いであり、ハーディ暫定大統領は首都サナアを捨てて、サウジアラビアのリヤドに避難する始末である。

しびれを切らしたサウジアラビアは UAE 等 GCC 諸国の他エジプト、ヨルダンなども抱き込んで「アラブ連合部隊」を結成、今年 3 月イエメン空爆に踏み切った<sup>18</sup>。連合部隊は地上兵力そのものは送り込んでいないが、各国の軍事作戦要員が現地に乗り込んで政府軍を支援している。イランの介入を防ぎ民主的に選ばれたハーディ政権を支援するためと言うのが理由である。

しかしイランがロケット砲など兵器を反政府軍に供給していることは間違いないにしても、現在のイランはシリア、イラクのシーア派支援に追われイエメン反政府軍の地上支援まで手が回らない。イエメンの市民の目に触れるのはサウジアラビアを主力とするアラブ連合軍の空爆であり、イラン兵士の姿は見えない。また選挙で自分たちがハーディを選んだとは言え、彼に託した平和の夢は何時までも実現しそうでないと感じている。これでは一般市民がアラブ連合部隊こそ自国に介入する外国勢力であり、ハーディ政府は傀儡政権だと考えても不思議ではない。空爆を続ければ続けるほどサウジアラビアに対する反感が強まることは間違いない。サルマン国王は矛盾を抱えたまま泥沼にはまり込んでいる。

もちろんサルマンも手をこまねいていたわけではない。3 月にはフーシ派を含むイエメンのすべての勢力をリヤドに呼んで和平を話し合った<sup>19</sup>。しかし事態打開の糸口は見えず、これまでの三度にわたる停戦の呼びかけも数日間で元の本阿弥に終わっている。アル・カイダ勢力はイエメンの主要港アデン市街に迫り(6 月)、フーシのロケット砲攻撃は止まず、サウジ兵士十数人が死亡している(8 月)<sup>20</sup>。そしてイエメンの一般市民や子供たちが空爆の犠牲になっている。

このような混乱の中で最近、UAE の特殊部隊が 1 年半以上アル・カイダの捕虜となっていた英国人石油技師を救出した、と言うニュースが流れた<sup>21</sup>。アブダビ皇太子から連絡を受けたキャメロン英首相は大いに感謝し、UAE は大きな得点をあげた。かたやサウジアラビアはアラブ連合軍のリーダーでありながらなんら国際的な評価を受けることもなく、泥沼のイエメン介入を続けている。連合軍の莫大な戦費はサウジアラビアが負担している。原油価格が低迷し歳入が激減する中で戦費だけ

がどんどん膨らんでゆく。2007 年以來の国債発行で当座しのぎをしているがいつまで続けられるのか。サルマン国王の息子で 30 歳そこそこのムハンマド国防相は実戦経験が無く、国の防衛を託するには甚だ心もとない。サルマン国王の苦悩は深い。

## 7. 揺らぐ「イスラムの守護者」神話



サウジアラビアが国教としているワッハーブ派とは 18 世紀にアラビア半島で法学者ムハンマド・ビン・アブドルワッハーブが唱えた急進的なイスラム復古思想のことである。彼はリヤド近郊ダルウィーヤ・オアシスの豪族サウド家のムハンマド・ビン・サウドと盟友関係を結び、ムハンマド・ビン・サウドによるアラビア半島中央部ネジド地方の平定に手を貸した(第一次サウド王朝)。豪族ムハンマドの征服活動を法学者ムハンマドが精神面で支えた形である。

その後サウド王朝は盛衰を重ねたが、ワッハーブ派の教えは引き続きサウド家の精神的支柱であった。20 世紀初めにアブドルアジズ・アル・サウド(通称イブン・サウド)が亡命先のクウェイトからネジドに戻り、オスマントルコ帝国の庇護を受けていたリヤドのラシード家を打ち破った。その後アブドルアジズは預言者ムハンマドの血を引くマッカの太守を追い出してマッカとマディナを制圧、さらに将来世界の油田地帯となるアラビア(ペルシャ)湾沿岸アル・ハサ地方を含むアラビア半島の大半を支配し、1932 年に現在のサウジアラビア王国を樹立したのである。サウジアラビアとは文字通り「サウド家」の「アラビア」という意味である。

彼のアラビア半島征服の過程で一時大いに力を発揮したのが狂信的なワッハーブ派信者の民兵組織「イフワーン団」である。狂信的な宗教集団が征服運動で強力な力を発揮することは何時の時代、何処の世界でも変わらない。アブドルアジズはイフワーン団に大いに助けられたのである。因みに「イフワーン」とは「同胞」という意味である。つまり「アラブの春」のエジプトで一時政権を握った「ムスリム同胞団」と同じ名前であり、ともにイスラム改革思想あるいは復古運動を唱える集団である。

ところがアブドルアジズがアラビア半島を制圧し世俗国家として独立しようとした時、純粋な宗教国家を目指す「イフワーン団」は反抗した。そのためアブドルアジズは「イフワーン団」を殲滅した後に「サウジアラビア王国」を建国したのである。アブドルアジズとイフワーン団が織りなした歴史は、世俗権力と宗教勢力の結託とその後の対立、そして最終的に世俗権力による実権掌握という歴史であるが、これは古今東西の歴史に頻繁に見られる図式である。

いつの時代にも世俗権力が宗教勢力を打ち負かすのであるが、世俗権力が宗教勢力にどうしても勝てないことが一つある。それは「legitimacy(統治の正統性)」である。成り上がり者である世俗権力には被支配者に対して自己の権力を正当化する理由が見当たらない。だから彼(あるいはその子

孫)は強権的な独裁者として無理に legitimacy を演出する他ないのである。しかし宗教勢力の場合には常に宗教そのものが正統性の根拠となり得る。『信ずる者は常に正しい』からである。

サウド家は結局自己の正統性をイスラム教スンニ派のワッハーブ主義に求め、これを国教と定めた。そして聖地マッカとメディナを守護することが「サウド家」の「アラビア」、サウジアラビアの支配者となる legitimacy であると内外に宣言したのである。

この legitimacy により 1932 年の建国から 20 世紀末までは常に「敵」の姿が明確だった。第二次大戦後にユダヤ人がイスラエルを建国した時、イスラムの第三の聖地エルサレムを占領しパレスチナ人を迫害するイスラエルは世界の全てのイスラム国家とアラブ国家の敵であった。そして 1973 年の第 4 次中東戦争では豊かな石油の富を武器にアラブ・イスラム諸国を支援しその存在感を高めたのである(第一次オイルショック)。

その後 1989 年にイランでホメイニ革命が発生、イスラム国家が生まれるとシーア派と言う新たな敵が加わった。シーア派対スンニ派と言う対立軸の中でサウジアラビアは豊かな石油の富と相まってスンニ派の宗教的リーダーとしてアラブ諸国から期待された。ファハド第 5 代国王は 1986 年、自らを「二大聖都の守護者」(Custodian of The Two Holy Mosques)と名乗り、全世界のムスリム(イスラム教徒)のためにマッカとメディナを守るのがサウジアラビア王国すなわちサウド家の義務であると宣言した。サウド家はイスラム、そしてスンニ派の守護者として自らの正統性(legitimacy)を主張し認めさせたのである。

しかし同じスンニ派の過激派組織アル・カイダが出現したころからサウド家の正統性の主張が揺らぎ始めた。それは「イスラム国」が生まれ、バグダディが自らを「カリフ」と主張したことによりさらに加速した。「カリフ」は預言者ムハンマドの後継者を意味し、預言者と同じクライシュ族の子孫でなければならないとされている。因みに「イスラム国」のバグダディは長々とした自分の名前の最後に「アル・クライシュ」を付けてクライシュ族の末裔であることを主張している。

バグダディが本当にクライシュ族の末裔であるかどうか定かではない。しかしサウド家はアラビア半島のベドウィン出身でありクライシュ族とは異なることは明らかのため「カリフ」を名乗ることはできない。さらに国教であるワッハーブ主義は 18 世紀にムハンマド・ビン・アブドルワッハーブが唱えたスンニ派の一分派に過ぎず、スンニ派全体をリードする宗派でもない。

サウド家は「二大聖都の守護者」を称することによりイスラム全体、あるいはスンニ派を守るかのごとき言動を弄してきた。しかし今やサウド家はイスラムを守っているのはではなく「二大聖都の守護者」と言うブランドに守られている、あるいはそのブランドにしがみついていると言って良い状況なのである。

## **8. 米国にすぎるほかないサルマン**





9月4日、サルマン国王は即位後初めて米国を訪問、ホワイトハウスでオバマ大統領と会談した。会談にはバイデン副大統領、カーター国防長官、ケリー国務長官など大物が顔をそろえ、対するサウジ側は息子で副皇太子兼国防相のムハンマドの他、国王顧問のアブドイッラー殿下など腹心の王族並びに財務相、商工業相、外相など主要閣僚が陪席した<sup>22</sup>。ただエネルギー関係の主要人物、すなわちナイミ石油相あるいは国王の子息のアブドラジズ石油省副大臣の名前が見当たらないことが若干気になるところである。後述するように現在の米国にとって原油価格あるいは安定供給は大した問題ではないからであろうか。

会談でオバマ大統領は「イランに核兵器を持たせない」ことをサルマン国王に保証し、イランの脅威におびえる国王はひとまず安堵したようである。とは言えサウジアラビアにとって軍事的脅威はイランだけではない。隣国イエメンでは反政府勢力のシーア派フーシ勢力およびスンニ派「アラビア半島のアル・カイダ(AQAP)」が優勢を誇っている。苦戦するイエメン政府に対してサウジアラビアはアラブ連合軍を編成して数カ月にわたり空爆を行ってきたが、事態打開の展望が開けないまま空爆による一般市民の被害が拡大しサウジアラビアは苦しい立場に追い込まれている。

さらにシリアとイラクにまたがって勢力を拡大しつつある「イスラム国」はインターネットを使った巧妙なソーシャルメディア戦術で周辺諸国の為政者を脅かしている。サウジ国内に「サウジアラビアのイスラム国」を名乗る過激派組織が出現しないと限らない。もちろん「イスラム国」は世俗勢力「サウド家」の「アラビア」を認めるはずはないので、おそらく「アラビア半島のイスラム国」とでも名乗るつもりであろう。世俗王政国家サウジアラビアの弱い下腹部を狙うイスラム過激思想の侵入はサウド家にとって最も厄介な問題であろう。サウジ政府は金に糸目を付けず軍備と最新ハイテク技術を導入して国境の防衛体制および国内の治安体制を強化しなければならない。

さらにシリアとイラクにまたがって勢力を拡大しつつある「イスラム国」はインターネットを使った巧妙なソーシャルメディア戦術で周辺諸国の為政者を脅かしている。サウジ国内に「サウジアラビアのイスラム国」を名乗る過激派組織が出現しないと限らない。もちろん「イスラム国」は世俗勢力「サウド家」の「アラビア」を認めるはずはないので、おそらく「アラビア半島のイスラム国」とでも名乗るつもりであろう。世俗王政国家サウジアラビアの弱い下腹部を狙うイスラム過激思想の侵入はサウド家にとって最も厄介な問題であろう。サウジ政府は金に糸目を付けず軍備と最新ハイテク技術を導入して国境の防衛体制および国内の治安体制を強化しなければならない。

サルマン国王は米国・イランの核合意をむしろ苦々しく思っており、それが証拠にオバマ大統領が5月にGCCサミットを呼びかけた時、皇太子および副皇太子を派遣し自らは欠席した。息子の副皇太子をロシアあるいはフランスに派遣し、両国大統領と会談させたのも米国への当てつけと言えなくもない。しかしサミットのわずか3か月後のサルマン自身の訪米は、彼の対米外交の迷走ぶりを示している。

これは今のサウジアラビアが米国に縋り付く他ないと言う事実を明白に物語っている。かつて世界が、そして米国自身がサウジアラビアの石油に依存して時代、サウジアラビアは石油戦略によってある程度米国と対等に渡り合えることができた。しかし米国内でシェール・ガスおよびオイルの生産が急増している。国際石油会社BPのデータをもとに試算すると、昨年の米国の石油と天然ガスの自給率は61%および96%であり、両者を合わせた自給率は75%に達する<sup>23</sup>。2007年の自給率



は 51%であったからシェール・オイルおよびガスが米国の自給率を劇的に変化させつつあることがわかる。米国の石油の輸入先は中南米、アフリカ西海岸など環大西洋諸国に移り、遠隔地のサウジなど中東地域は対象外となりつつある。米国はもはやサウジアラビアの石油を必要としなくなっており、エネルギーに関する両国の力関係は 180 度変化したのである。

さらに米国は地政学的な軸足を中東から環太平洋地域に移している。サルマン国王は中東紛争を調停してくれる域外の国としてロシア、フランスに秋波を送ったが、この2か国にそのような能力が無いことは明らかである。ロシアは米国と対抗するためだけにサウジに玉虫色のシグナルを送り、かたやフランスは旧植民地のシリアなどレバント諸国の混乱には見て見ぬふりで、難民問題にも及び腰である。

サウジアラビアは米国のロッキード・マーチン社からフリゲート艦 2 隻など 10 億ドル相当の兵器を買い付けるようである<sup>24</sup>。サウジアラビアは世界第 5 位の兵器輸入国であり、米国の国防産業の最大の顧客である。サルマン国王が米国と対等に話ができるのはこの点だけであり、その他については米国にすぎる他ないのである。

上記以外でサルマン国王がもう一点米国にすぎるとすれば、それは息子ムハンマド副皇太子のことではないだろうか。余命が長くないサルマンにとって若いムハンマドを次々期の国王にすることは悲願である。それは例えて言うなら豊臣秀吉とその子秀頼の関係である。秀頼は秀吉 57 歳の時の子であり、秀吉は死の間際まで秀頼の行く末を案じていた。サルマンもきっと心の中で叫んでいるに違いない。「ムハンマドをよろしく願います！」と。

以上

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601  
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642  
E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp

---

<sup>1</sup> Kuwait Times on 2015/6/26, 'Saudi, France to sign billions in ship, plane deals'  
<http://news.kuwaittimes.net/saudi-france-to-sign-billions-in-ship-plane-deals-france-to-study-building-nuclear-reactors-in-kingdom/>

<sup>2</sup> レポート「2050 年にはキリスト教徒に肩を並べるムスリム人口—Per Research Centre レポート」(2015 年 4 月)参照。  
<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0339WorldMuslimPopulation2015.pdf>

<sup>3</sup> Arab News on 2015/1/24, 'King Salma's vision: Stability, unity'  
<http://www.arabnews.com/featured/news/693991>

<sup>4</sup> Arab News on 2015/1/27, 'Saudi Arabia's next generation emerges'  
<http://www.meed.com/sectors/economy/government/saudi-arabias-next-generation-emerges/3204986.article>他

---

<sup>5</sup> Arab news on 2015/4/30, 'King Salman names Mohammed bin Naif as new Crown Prince',  
<http://www.arabnews.com/featured/news/739466>

<sup>6</sup> Arab News on 2009/8/28, 'Prince Muhammad escapes assassination attempt',  
<http://www.arabnews.com/?page=1&section=0&article=125881&d=28&m=8&y=2009>

<sup>7</sup> 拙稿「中東VIP劇場サウジアラビア篇：サルマンは皇太子失格？」参照  
<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0305VipSaudiSalman.pdf>

<sup>8</sup> 「サウド家第二～第五世代の主要王族」参照  
<http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/3-1-1.pdf>

<sup>9</sup> サルマン国王家系図：<http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/3-1-7.pdf>

<sup>10</sup> [https://en.wikipedia.org/wiki/Mohammad\\_bin\\_Salman\\_Al\\_Saud](https://en.wikipedia.org/wiki/Mohammad_bin_Salman_Al_Saud)参照。

<sup>11</sup> Saudi Gazette on 2015/4/29, 'A prince with massive capabilities'  
<http://www.saudigazette.com.sa/index.cfm?method=home.regcon&contentid=20150430242158>

<sup>12</sup> Arab News on 2015/5/11, 'Crown Prince to lead KSA delegation to Camp David'  
<http://www.arabnews.com/featured/news/745266>

<sup>13</sup> Saudi Gazette on 2015/7/18, 'Kingdom, Russia sign landmark pacts to bolster historic ties Deputy Crown Prince Muhammad meets Putin'  
<http://www.saudigazette.com.sa/index.cfm?method=home.regcon&contentid=20150619247787>

<sup>14</sup> Arab News on 2015/6/24, 'Royal visit to give a fillip to Riyadh-Paris relations'  
<http://www.arabnews.com/news/766666>

<sup>15</sup> Kuwait Times on 2015/6/26, 'Saudi, France to sign billions in ship, plane deals – France to study building nuclear reactors in kingdom'  
<http://news.kuwaittimes.net/saudi-france-to-sign-billions-in-ship-plane-deals-france-to-study-building-nuclear-reactors-in-kingdom/>

<sup>16</sup> Arab News on 2015/8/28, 'King's visit to herald new era in Saudi-US relations'  
<http://www.arabnews.com/featured/news/798076>

<sup>17</sup> Gulf Times on 2012/5/23, 'Qaeda suicide bomber kills 96 Yemeni troops'  
[http://www.gulf-times.com/site/topics/article.asp?cu\\_no=2&item\\_no=507194&version=1&template\\_id=37&parent\\_id=17](http://www.gulf-times.com/site/topics/article.asp?cu_no=2&item_no=507194&version=1&template_id=37&parent_id=17)

<sup>18</sup> Arab News on 2015/3/26, 'KSA launches air strikes in Yemen against Houthi militants'  
<http://www.arabnews.com/middle-east/news/723471>

<sup>19</sup> Arab News on 2015/3/12, 'GCC invites all Yemeni factions, including Houthis, to Riyadh talks'  
<http://www.arabnews.com/featured/news/717331>

<sup>20</sup> Saudi Gazette on 2015/8/25, '3 Saudi soldiers die in line of duty, one killed in crash'  
<http://www.saudigazette.com.sa/index.cfm?method=home.regcon&contentid=20150826254538>

<sup>21</sup> Khaleej Times on 2015/8/24, 'UAE forces free British hostage from Al Qaeda'  
<http://www.khaleejtimes.com/nation/government/uae-forces-free-british-hostage-from-al-qaeda>

<sup>22</sup> Arab News on 2015/9/5, 'Iran won't have nukes, US assures KSA'  
<http://www.arabnews.com/featured/news/801861>

---

<sup>23</sup> 拙稿「BP エネルギー統計 2015 年版解説シリーズ」参照。

<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0349BpOil2015.pdf>

<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0353BpGas2015.pdf>

<sup>24</sup> MEED on 2015/9/3, 'Saudi Arabia looks to buy US warships'

<http://www.meed.com/sectors/industry/defence/saudi-arabia-looks-to-buy-us-warships/321426>

[7.article](#)